小型ロケット開発順調

玉野高など女子中高生チーム

自作の小型ロケットの高度などを競う「第33回モデルロケット全国大会」（20日、茨城県つくば市）に初出場する玉野高などの女子中高生チームのロケット開発が大詰めを迎えている。試作機の一つは目標としていた高度100メートルを突破。メンバーは「さらに改良を加えて入賞を狙う」と意気込んでいる。（松山定道）

大会は日本モデルロケット協会（埼玉県）が年2回開催。市販の火薬エンジンを使うモデルロケットで、パラシュート付きの機体が着地するまでの滞空時間▽搭載したカプセルを所定の場所を狙って落として誤差を競うペイロード（搭載物）定点着地▽到達高度―の3種目で順位を争う。航空宇宙関係の技術者らも出場する。

専門家と同じ土俵で競うことで、工学系に進むケースが少ない女子中高生に科学技術への興味、関心を高めてもらおうと教育支援企業のリバネス（東京）は出場支援プロジェクトを企画。全国10校の応募から玉野高チームなど3校を支援対象に選んだ。

玉野高チームのメンバーは1～3年の生徒有志6人に倉敷市の県立天城中、市立東陽中の3年生3人を加えた計9人。5月からモデルロケット開発に取り組んできた。

高く飛ばすポイントは機体重量と空気抵抗。先端部やエンジンを固定する「マウント」といった主要部品は3Dプリンターで作り、精度や強度を確保。機体そのものは紙を巻いて作り、全長25センチ以上、直径25ミリ以上という規定を満たしながら、約30グラムと軽量化を図っている。

9月24日にはリバネス社員の瀬野亜希さん(33)が玉野高を訪れて実技指導し、同じく出場する千葉県立佐倉高チームとテレビ会議で交流した。

試作機は7基を打ち上げ、うち1基が高度約103メートルと前回大会の優勝記録（100・21メートル）を超えた。ただ、長い滞空時間を狙った機体はパラシュートがうまく開かず、ペイロードも目標地点から大きく外れた。

天城中3年藤田紗矢さん(15)は「自分たちのロケットが高度100メートルを超えるなんてすごい」と喜び、玉野高2年森下加奈巳さん(17)は「さらに高度の記録を伸ばすため試行錯誤を重ねたい」と意欲を見せた。

瀬野さんは「玉野高は3Dプリンターの活用などで、思った以上に開発が進んでいる。ミスがなければ大会でも記録が期待できそう」と話した。

20日、茨城・全国大会

改良し入賞目指す

試作機を打ち上げる玉野高の女子生徒ら＝9月24日

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

2018年10月3日 山陽新聞朝刊 28ページ